Infolettre de l'AJEQ

Association japonaise des études québécoises

日本ケベック学会ニュースレター

2022 年　秋季号
第 13 巻第 2 号（通算 35 号）
2022 年 12 月 28 日発行

2022年度　全 国 大 会 特 集 号

第 13 回全国大会総括：
2022 年度全国大会を振り返って

丹羽 卓（金城学院大学）

第 14 回の全国大会でまず特筆すべきことは、2 年越しの対面開催だったことです。第 12 回と第 13 回は COVID-19 の感染拡大のため、オンラインのみでの開催を余儀なくされました。オンライン開催の利点を活かして、それ以前ではなし得なかったことができたのも事実ですが、スクリーン越しにしか参加者の顔が見られず、直接声を交わせないという寂しさは否定のしようがありませんでした。対面開催になって、今回久しぶりに顔を合わせる人が大半で、それは本当に嬉しいことでした。直接会って、空間を共有することの意義がよくわかりました。

その一方で、ハイブリッド開催でしたので、オンラインの利点も活かすことができました。対面参加者よりもオンライン参加者の方がかなり多かったことからも、それがわかります。遠方まで足を運ぶだけの余裕のない方でも気軽に参加いただけるのが、オンラインの最大の長所でしょうか。会員外の参加者数も多かったのも、見知らぬ学会の大会に出向くのには多少躊躇があっても、オンラインなら敷居が低いからなのでしょう。基調講演者など海外からの参加者も、録画やリアルタイムのオンラインという形で参加してくださいました。直接お会いするのと比べて、質問をしたり言葉を交わしたりという機会が制限されるのはやはり残念ですが、IT 技術のおかげで来日できなくても参加していただけたのはよかったです。

今回が初のハイブリッド大会でしたので、準備も大変でしたし、当日も開始後しばらくは技術的な問題が発生し、オンライン参加の方々にはご迷惑をおかけしましたが、

開会式（左上から時計回りに、総合司会の加藤普会員、シェニエ・ラ＝サール・ケベック州政府在日事務所代表、宮田由紀夫関西学院大学国際学部長、丹羽卓会長）

●本号の内容●

巻頭言（丹羽卓）… 1　　全国大会各セッション報告… 3

なんとか乗り切ることができました。今後、革新もさらに進み、使用する側も慣れてくるでしょうから、AJEQ 大会に限らず、このハイブリッド形式での大会開催が普通になるのだと思います。それにしても、今回のハイブリッド開催の準備から当日の運用まで一手に担ってくださった杉原企画・実行委員長には大変なご苦労をおかけしたことを思い、この場を借りて深くお礼を申し上げます。

大会の内容については、今回もこれまでの大会に負けない充実したものでした。大会のテーマは「ケベックにおけるフラン語教育」。北米の英語の大海の中にぽつんと孤立したフランス語コミュニティがどうやって生き延びるかというのが、ケベックの長年の課題です。時とともに伝統的な「フランス的事実」が失われていき、今やケベックにとって、フランス語こそが自分たちのアイデンティティの最後の砦となっているとも言えるでしょう。英語の海に取り囲まれているだけでなく、グローバリゼーションの中で、英語の強烈な圧力にさらされている状況にあって、自分たちの子孫、あるいは移民・難民にどうやってフランス語を教えるかという課題に、ケベック政府はじめいろいろな人が立ち向かってきました。ですから、ケベックにおけるフランス語教育は単なる言語教育にとどまりません。社会的にも非常に大きな意味を持つものです。今回のシンポジウムの副題が「社会文化的コンテキストのなかで」となっているのもそのためだと思います。

このテーマに合わせくださったのでしょうか、恒例の韓国ケベック学会からの派遣発表者に、ソウル大学のキム・エンジュン先生が選ばれ、ケベックにおける第二言語としてのフランス語教育の現状をヨーロッパ言語共通参照枠に照らして説明してくださいました。基調講演はモンレアル大学のフランスワーズ・アルマン先生で、モンレアルの学校の多文化の様相と、そこでの第二言語としてのフランス語教育がどのように包摂的であるかについて、映像も交えて語ってくださいました。これには小松祐子会員によるパワーポイント・スライドの献身的な翻訳が大きな力となりました。

基調講演とこの発表に続くシンポジウムでは、まず、ケベック・フランス語の特徴の実証的調査の報告およびケベックで使用されているフランス語教科書の問題点指摘がなされました（近藤野里会員）。続いて、移民統合のために UQAM 付属の語学学校とラヴァル大学のプロジェクトで行われている活動の 2 例が紹介されました（松川雄哉会員）。締めくくりはモンレアル発生の画期的語学教育法であるイマージョン教育の現状と、高評価であるにもかかわらず広がらない原因（教師不足など）が示されました（小松祐子会員）。どれも興味深く聞けましたが、一見するとつながりのなさそうなこの 3 つの発表に、社会文化的な深い関連があることを見抜いてコメントしてくださった、ゲストコメンテーターの西山教行先生

（日本フランス語教育学会会長）の慧眼には感服しました。

残る２つの自由論題の興味深い発表に触れる紙面の余裕はありませんが、どうしても言及しなければならないのが、新企画のランチタイム・トークです。昼食休憩時間に昼食を食べながら、少し柔らかい話を聞こうという趣旨で、第１回はスティーブ・コルベイユ会員がケベックの新聞の風刺画を取りあげて、映像を見せながらわかりやすく語ってくださいました。風刺画が一般の関心の的であるという日本との違いにまず驚き、それを分析することの面白さもわかりました。次回もこうした企画ができることを楽しみにしています。

今大会でひとつ心残りなのは、懇親会ができなかったことです。感染の可能性が高い懇親会を避けたのは妥当な判断ですが、それがあればさらに深い議論もでき、交流の輪も広がっただろうにと思うと、やはり残念と言わざるを得ません。次回大会は懇親会も備わったさらに豊かな大会となるよう期待しています。

（日本ケベック学会会長）

****

＜各セッション報告＞

2022 年度全国大会は、ケベック州在日事務所代表シェニエ・ラ＝サール氏ならびに共催校代表の宮田由紀夫学部長のご挨拶に始まり、自由論題、基調講演およびシンポジウムで活発な議論が繰り広げられました。以下は、それぞれの司会者からの報告です。

****

自由論題セッション

司会：真田 桂子（阪南大学）

午前の自由論題の部では、オンライン参加による韓国のキム・ウン・チョン氏の発表を含む 3 人の研究発表があった。

最初の報告は、神崎舞会員（同志社大学）の「ロベール・ルパージュとケベック―作品の変遷と原点への回帰―」と題された発表で、「文化の外交官」との異名をもつルパージュの作風の変遷に注目し、そこに演出家とケベックとの関係の変化を読み取り、とりわけ原点への回帰について分析を行った発表であった。

ケベックが、アイデンティティの構築と主権をもった「ネイション」の形成と維持に腐心する上で、文化を戦略的に捉え手厚い公的支援による文化振興を行なっていることはよく知られている。フランス語という言語に加えて、文化はケベック独自のアイデンティティを構築する要素として、その成熟が戦略的に目指されたのである。そこに大きく貢献してきたのが、演出家ロベール・ルパージュ（Robert Lepage, 1957-）で、この演出家は視聴覚的な要素を取り入れながら、普遍的なテーマを扱い、カナダ国内に留まらず国際的に活躍してきた。し

かし興味深いことに、2010 年代頃より、ルパージュはケベックやカナダの歴史を扱った作品を発表し、le Diamond という名の自らの劇場をケベック・シティに創設したりするなど、その作品や取り組みには、原点への回帰ともいえるような特徴が顕著になっている。神崎氏は、長らく外に注がれていたルパージュの視線が、ケベックの内へと向く傾向が見られ、それは自らが歩んできた道のりを振り返る行為であったと説く。さらにこのような変化の契機には、ケベックの文化的成熟がもたらした影響があり、一方でルパージュが自らの成功のうちにある種の商業的消費への幻滅を味わったからではないかとの指摘は興味深く示唆的であった。

続く佐々木菜緒会員(白百合女子大学)の報告は、イヴ・テリオー(Yves Thériault, 1915-1983)の『孤独な者のためのお話』（Contes pour un homme seul）を分析した「イヴ・テリオーの民話作品における男女と言語」と題された発表で、ケベックの民話作品（conte）の地平に新たな視座をもたらしたとされるこの作品について、同作品にあらわれる男女とことばの関係に注目し、テリオーが民話形式をコミュニケーションの問題と関連させどのように描いているかを分析したものであった。ケベックにおいて民話とは、民俗的なもの、あるいは幻想的なものと結びついたジャンルとして解釈されるが、佐々木氏は、テリオーにおける民話は、いわば「ケベック的」であるというよりも、むしろ普遍的な人間存在そのものを扱っていると考える。いわば民話は、物語る行為の原型として捉えられ、ここでは普遍的なテーマである primitif、すなわち未開で原始的なものに迫る表現手段と考えられる。タイトルにある「孤独な者」に示されるように、テリオーはこの民話によって個人と集団の関係についての問題に迫り、同時に男女のコミュニケーションに内在する不条理や非論理的な側面や、思考の限界の問題を掘り下げようとしたと佐々木氏は主張する。イヴ・テリオーの代表作の『アガグック』は先住民の世界を描き、伝統、血統の継承のあり方を問う作品として知られ、テリオーの祖父が先住民であったとの伝聞もあるため、テリオーと言えば先住民との繋がりばかりが強調されるが、佐々木氏の報告はそうしたステレオタイプの読みを払拭し、民話と primitif という普遍的なテーマとの結びつきを解明しようとした興味深い発表であった。一方、惜しむらくは、上記

（左上から時計回り）司会の真田桂子副会長、神崎舞会員（同志社大学）、佐々木菜緒会員（白百合女子大学）、KIM En-Jung 氏（ソウル大学校）

のように独自性のある発表であったにもかかわらず、タイトルと発表内容の整合性が今一つ明確ではなく、時間の関係もあろうが、作品分析においての引用が短かすぎていささか説得力を欠いてしまったことである。しかし、神崎会員と佐々木会員の発表は、ともにすでに古典的といえるケベック文学の作家や作品を取り上げながら、そこに新しい価値を見出そうとする意欲的な内容であった。

自由論題セッションの最終報告は、韓国のキム・ウン・チョン氏(ソウル国立大学)がZOOM により登壇し、オンラインで「Étude sur l'état actuel de l'enseignement du français au Québec」と題された研究発表を行った。ケベック州では、フランス語は言語的な価値を有するにとどまらず、アイデンティティに係る文化装置としての価値をもっており、フランス語教育は その文化的伝統を維持するために必要不可欠なものとなっていると言えるだろう。キム氏は、ケベックにおける外国語教育の基礎ともなっている「ヨーロッパ言語共通参照枠(CEFR)」の適用状況に着目し、CEFR がどのような存在感を有しているのかに焦点を当てようとした。キム氏は、図表やグラフ、表など豊富な資料を提示しながら、まずケベックの第二言語としてのフランス語教育におけるフランス語と CEFR の意義について検討し、第二に、ケベック州のアングロフォン系学校の授業計画やカリキュラムの分析を通じて、そこでの教育における CEFR の活用状況を明らかにしながら分析した。キム氏の発表は、午後のフランソワーズ・アルマン教授の基調講演やシンポジウムの内容とも関連するもので、今大会のプログラムにふさわしい研究発表であった。

対面とオンラインによる発表が共存し、一時、通信が不安定で聞き取りにくい場面も生じたが、質疑応答も行われ、ハイブリッド型の研究発表によるセッションは無事に終了した。

****

ランチタイム・トークにおける
スティーブ・コルベイユ副会長

****

基調講演

司会：小松 祐子（お茶の水女子大学）

ケベック州の社会文化的なコンテキストのなかでフランス語教育について考えることをテーマに掲げた本大会では、モンレアル大学教育学部のフランソワーズ・アルマン（Françoise Armand）教授に講演をいただいた。タイトルは「多文化の中心にある第二言語としてのフランス語：ケベック州でのインクルーシブ教育の実践」である。

コロナ第 7 波の影響で残念ながら来日は見合わせられ、事前に収録された動画によるご講演となったが、豊富なスライド資料や教室活動の動画を使用し、ご自身が進めてこられたインクルージブなフランス語教育プロジェクトの一部をご紹介下さった。

講演はケベック州のフランス語学校の社会言語的状況の紹介からはじまった。ケベック州ではフランス語憲章（101 号法）の規定により、新規移民の子どもたちが初中等教育をフランス語で受けることが義務付けられている。フランス語学校ではさまざまな地域の出身で異なる言語をもつ生徒を大量に受け入れており、2019-2020 年には、ケベック州で就学前・初等・中等教育を受ける生徒の 31.2%が移民出身であった。とくにモンレアル地域の学校では、移民出身の生徒が 67.3%を占め、180 種類の言語が話されている。教師らにとって、これらアロフォンの生徒たちの母語をいかに考慮に入れるかが課題である。

生徒の母語を考慮に入れることは、言語の相互依存と転移によりフランス語の習得を促進し、彼らの言語文化的背景を承認し尊重することによって、多様性に開かれた前向きな雰囲気を作り出すことができる。アロフォンの生徒たちは、さまざまな言語で自分の知識とスキルを結集・強化し、フランス語の学習とフランス語を使った新しい知識の習得に前向きに取り組めるようになる。

ケベック州でのインクルーシブな教育実践（複言語アプローチ）において、教師たちに求められるのは、子どもたちと彼らの家族の経験と知識を障害ではなく資産と見なし、学習者が異なる言語のあいだを行き来することを正当なことと考え、その価値を認めることである。

ELODiL（「言語への目覚め、言語多様性への開かれた態度」研究プロジェクト）の公式サイト（www.elodil.umontreal.ca）上には多くのリソースが公開されている。代表的な実践例として、1）言語への目覚め活動、2）複言語アイデンティティ・テキスト、3）複言語アイデンティティ・テキストと演劇、という 3 種類の活動を紹介くださった。言語への目覚め活動は、80 年代初頭に英国で登場し、欧州では Evlang（Candelier, 2004 - France）、EOLE（Perregaux et al., 2003 - Suisse ）などのプロジェクトが展開されている。子どもたちは複数の言語を学び合い、言語による単語や文の構成の違いを比較し、互いの言語文化への理解を深め、

司会の小松祐子会員（お茶の水女子大学）
フランソワーズ・アルマン教授（モンレアル大学）

尊重しあう姿勢を身につける。複言語アイデンティティ・テキストでは、生徒たちが家族について母語とフランス語で作文し、読み上げる発表会の様子が動画で示された。複言語作文に演劇活動を加えた研究では、フランス語で書くことへの積極的な取組みが見られ、より長い文章、より発展した考え、より多くの語彙知識が得られたことが示された。

さらに就学前クラスを対象とした「ÉLODiL 複言語アルバム：オーラルと筆記言語の能力開発」のプロジェクトが紹介された。デジタル教材として開発された複言語アルバムには 11 の絵本作品が収められている。これらはケベック州の学校で最も話されている言語（アラビア語、中国語、クレオール語、スペイン語など)、モンレアル地域で最も話されている言語(ベンガル語、タミル語、パンジャブ語など)、さらに先住民の言語（アティカメク語、イヌー＝アイムン語)の計 22 言語に翻訳され、全作品にフランス語音声、7 作品には他の言語の音声も収録されている。

プロジェクトでは、 11 作品中 7 作品について、教育活動の設計と実験が行われた。「読書の準備」、「語彙の活動」、「物語のオーラル理解」、「言語多様性への開かれた態度」、「筆記の概念」、「語りの創作」などの指導を受けた実験群の子どもたちは、統制群と比較して、フランス語学習に自信をもち、フランス語を聞き話すことを好むとともに、自分の言語に誇りを持つことが明らかになった。 多くの教師が、生徒らのオーラル理解能力、物語のテーマについて考察し議論する能力、新しい語彙の獲得に発達が見られ、学習意欲と満足が増していると答えている。

このように興味深い実践例を、明快な口調で次々と手際よく紹介くださり、言語文化的多様性が増すケベック州において複言語・複文化アプローチによるフランス語教育を行う重要性とその有効性について、短時間でしっかりと理解することができた。アロフォンの子どもたちが生き生きとした表情で教室活動に参加する動画が印象深かった。大変充実した講演であった。

****

シンポジウム：

「ケベックにおけるフランス語教育：社会文化的コンテキストのなかで」

司会：西川 葉澄（慶應義塾大学）

2022 年度の全国大会において「ケベックにおけるフランス語教育：社会文化的コンテキストのなかで」と題されたシンポジウムが開催され、ケベックにおけるフランス語教育に関して 3 件の報告がなされた。ケベックにおけるフランス語教育という共通のテーマをめぐるものでありながらも、第二言語・外国語教育において扱われるケベック・フランス語の語彙の分析、移民の社

会統合のため大学での外国人留学生を対象とするフランス語教育による支援、ケベック州の英語学校におけるフレンチ・イマージョン教育について、というように多角的な視座を持つ意義深いシンポジウムとなった。コメンテーターとして京都大学の西山教行氏を迎え、各報告へのコメント及び質問をいただき、それぞれのパネリストがコメントに返答をすることで対話とする形式となった。また、ハイフレックス形式で行われた大会の特性を活かし、3 名のパネリストのうち 2 名とコメンテーターおよび司会者は会場からの参加、1 名のパネリストはオンラインからの報告という構成になった。

１件目の報告は、近藤野里会員（青山学院大学）による「ケベック州で出版されたフランス語教科書にみられるケベック・フランス語の語彙について」であった。ケベックで一般的に使用されるフランス語には、ケベック特有の語彙や表現が存在する。その内訳はアルカイスム、アングリシスム、ケベックの文化や社会の特殊性を反映する語彙など様々であるが、そのような語彙・表現がケベック州で出版された第二言語・外国語としてのフランス語習得用の教科書においてどのように扱われているかが、詳細な分析によって明らかにされた。報告者は標準ケベック・フランス語の語彙と、辞書において「非標準的(non standard/familier)」と定義される語彙の提示方法に着目し、非標準的とされる語彙には教科書において社会文化的知識を補う付加情報がどのように与えられるかが示された。コメンテーターの西山氏からは、アングリシスムが言語接触の結果である言語現象としてケベックの住民たちに承認されているのか、および標準的なケベック・フランス語と社会階層の関係について質問がなされた。

２件目の報告は、松川雄哉会員（早稲田大学）による「移民の社会統合を支えるフランス語教育：ケベック州の大学における取り組みについて」であった。ケベックにおいて非フランス語話者の移民の社会統合を促すためには、フランス語教育の重要性が指摘されているが、多くの新来移民たちはケベック人とフランス語でコミュニケーションすることに困難を感じており、ケベック人と質の高い交流を図る機会を持てる

（左上から時計回り）司会の西川葉澄会員、近藤野里会員、小松祐子会員、松川雄哉会員、コメンテーターの西山教行氏（京都大学）

ことがフランス語運用能力の向上及び、社会統合への重要な課題となっているという。ケベック州の大学においては非フランス語話者の留学生を対象に、彼らのフランス語学習や社会統合を促進する目的及び、教員養成等の一環としてさまざまな試みを行なっているという。UQAM（ケベック大学モンレアル校）での Jumelage interculturel、ラヴァル大学の Rêver en français での活動が紹介された。コメンテーターの西山氏からは、留学生のフランス語教育支援活動に実際に関わる学生やシステムについて、および参加者のニーズについての質問がなされた。

３件目の発表は、小松祐子会員（お茶の水女子大学）による「ケベック州におけるイマージョン教育の現状と課題」であった。カナダにおけるイマージョン教育プログラムとは、英語学校の生徒を対象にフランス語により数学、科学、歴史、地理などの授業が実施されるいわゆる「フレンチ・イマージョン」であり、大量のインプットによる自然なフランス語習得による英語とフランス語のバイリンガル養成がその目的である。イマージョン教育には一定の成果が認められており、アングロフォン家庭のニーズを受けてケベック州以外にもカナダ全土に広がりつつあるが、課題としては教員不足などがあげられる。また、2022 年６月に発効されたケベックのフランス語化の強化を狙う 96 号法により、CÉGEP でフランス語履修が義務となるなど、増加するアロフォン学生から今後の反発も懸念されるという。ケベック州のフランス語の重要性と特殊性を考えさせられる示唆に富む発表であった。コメンテーターの西山氏からは、カナダにおけるバイリンガル話者の増加が示す内訳には、新来移民が貢献しているのではないかという質問がなされた。

北米最大のフランス語圏でありながら、北米大陸という地理的要因により英語話者の地域に囲まれ、大海の中の孤島とも喩えられるケベック州の特殊なフランス語教育事情の一端を社会文化的コンテクストにおいて位置付ける３つの角度から立体的に考える機会となったと言える。そしてそれぞれの報告が西山氏の的確なコメントと質問を端緒とする対話により、一層深みが出たものとなった。現代のケベック社会のあり方をフランス語教育の面から俯瞰するような意義深いシンポジウムであった。

****

（左）閉会式での大石太郎会員、（右）2022 年度 小畑ケベック研究奨励賞授与式における丹羽会長と受賞者の西川会員

****

閉会式後の集合写真

●編集後記●

刊行が遅れてしまいましたが、毎年恒例となっている大会特集号をお送りします。今回も非常に充実した全国大会でした。その雰囲気を少しでもお伝え出来たならば幸いです。年末が近づいてしまいました。皆様も良いお年をお迎えください。Bonne année!（IH）

AJEQ ニュースレター
年 2 回発行
発行人：丹羽 卓　　編集人：廣松 勲